道新聞　第3種郵便物認可

道内の公設民営学習塾の草分けである十勝管内足寄町の「足寄町学習塾」が、今年10月で5周年を迎える。同町唯一の高校である足寄高の存続危機がきっかけとなって誕生し、現在は足寄高全生徒171人中119人が在籍。開設当初から塾長として力を注ぎ、生徒一人一人の個性を重んじる授業を行ってきた。塾開設からの奮闘を描いた本も今月15日に出版、高校存続が地域活性化に大きく寄与することを力説している。　（聞き手・本別支局　広川春男）

公設民営の足寄町学習塾塾長　樽沢（たるさわ）　俊宏（としひろ）さん（45）

＝十勝管内足寄町

丁寧な指導　高校存続の力に

自著を手に、公設民営学習塾の価値を強調する樽沢俊宏さん（井上浩明撮影）

1974年、函館市出身。中学時代は札幌で過ごした。札幌の大学を卒業後、東京の大手自動車メーカーで法人営業を担当。98年に道内外で塾を展開する「Ｂｉｒｔｈ47」（東京）に転職。同社が足寄町から運営を委託された足寄町学習塾の塾長を務める。今月15日に出版した「地方創生の実践」（ＷＡＶＥ出版、1400円）では学習塾の足跡や実績を記した。

――あらためてですが、どのような授業を行っていますか。

「各生徒の進路や学力などに応じ、手作りのプリントを多用した個別指導で学力向上を図ってます。講師が生徒の近くで勉強の仕方を伝えるため、講師を囲むように机を配置しています。アウトプット学習も重視しています。例えば『鎌倉時代の旧仏教と新仏教を説明してみて』と問い、生徒に説明してもらう。そうすることで知識が確実に身につきます。また、タブレット端末を活用した映像指導にも力を注ぎ、効率的な授業を行ってます」

――運営に当たり心掛けていることはありますか。

「私たちは、生徒一人一人に心を配りながら対応していかなければならないと感じています。勉強のみならず、生徒の趣味や趣向、学校生活の悩みなどを把握し、耳を傾けていくことが、ひいては学力向上につながっていく。こうした対応の仕方を生徒はもちろん保護者や学校もこれまで以上に求めていると思います」

――生徒たちの反応は。

「生徒から『毎日塾に通いたい』との声も少なくありません。私を含め講師は4人ですが、要望に応えられるように努力したい。『レクリエーションがあるとうれしい』との声もあります。毎年秋に足寄神社例大祭の縁日に塾生が露店を出して参加し、地域の人たちにも好評です。このほかにもバーベキューパーティーや気になる新聞記事を読んで意見交換する『まわしよみ新聞』なども催し、講師と塾生、塾生同士のコミュニケーションを深めていきたいと考えています」

――新型コロナウイルスによる影響はありますか。

「学習塾も今月末まで臨時休校にしています。生徒の学力低下が心配です。特に受験を迎える3年生は大切な4、5月に塾に通えなかったので影響は大きい。自宅学習のためのプリントを配布していますが…。6月に予定する再開後はフォロー・アップに全力を注ぎます。今年は国公立大を希望する3年生が例年の2倍ほどいます。難関の北大薬学部の受験を目指す生徒もおり、必ず合格させたい」

――教育の分野を歩んだきっかけは。

「大学時代は学校の教員になろうと考えていましたが、関心が薄れ、卒業後は大手自動車メーカーに入社しました。しかし、当時のお客さんから『孫の勉強を少しみてもらえないか』と依頼されたのがきっかけで、再び教育の道に進むことになりました。成績が上がると子どもの表情も明るくなった。子どもたちの心に学ぶ喜びを育む楽しさを知ったのです」

――出版した本の狙いと内容は。

「公設民営塾の詳細を知る自治体が少ないので、もっと知ってほしいとの願いを込め出版しました。足寄町学習塾の設立の過程から地域とのふれあい、足寄高との連携などを書いたほか、安久津勝彦前町長のインタビューや新聞記事なども収録しました。高校存続は地方創生の要とのメッセージが伝わるとうれしいですね」

聞き手から

樽沢塾長が、当時の仕事先のお得意さんから「家庭教師」を依頼されたのは「20÷5」の計算もできない小4の女の子だったという。少女と心を通わせながら勉強を教えたという塾長自身も、少女から教える楽しさを学んだそうだ。

「教えることは教わること」。塾長の姿勢に胸が打たれた一方、五十路を過ぎたわが身を振り返り、残りの人生の生き方の参考にしたいと思った。

輝いて　道東　ひと巡り